The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日韓自由会話の分析枠設定の試み ： 話題と参加形式の観点から
Author(s)	張, 允娥
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2015, 49, p. 57-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日韓自由会話の分析枠設定の試み

――話題と参加形式の観点から――

張　允 娥

キーワード：自由会話／分析単位／話題／参加形式／性差

1. はじめに

言語を分析する際には、音素や語あるいは文などといった分析の単位が必要となる。同様に、会話を分析するに当たっても、一定の基準から会話の単位を決める必要がある。特に、相互行為における男女差や異なる言語の会話を比較・対照する場合は、その比較のための分析の枠が必要となる。

会話には、様々な種類があり、会話を行う目的も多様であるが、ある場面においては会話をすること自体が目的になる場合がある。それは、親しい友人と自由に会話をする時である。親友との自由会話は、勧誘や依頼などといった目的をもった会話とは異なって、その場の会話を通じて達成しなければならない目的はなく、会話の参加者は互いに話題を探り、どのような話題についてどのように話すかを常に考えながら会話を進行させていく。つまり、自由会話は参加者の複数の発話から成り立った話題が積み重ねられたものであると言える。しかし、自由会話を実際に分析するに当たっては、会話で展開された複数の話題をどのように認定するか、そして、話題を構成する要素はどのように認定すればよいか、また、参加者の発話をどのように区切り、一つの発話として認定するかなどといった点が問題になる。

本稿では、たとえば日韓の自由会話を対照するに当たっては、以下の二つの異なる次元から分析の枠を設定する必要があることを提示する。

・内容の観点：「話題」と「物語・評価・描写」（§2）
・会話の参加形式の観点：ソロパートとデュオパート（§3）

そして、事例として、日本と韓国の女性同士と男性同士の二者間の自由会話をこの枠を適用して分析し、その特徴の共通点と相違点を明らかにすることによって、この枠の有効性を確認することにする（§4）。なお、分析に用いるデータは、日本と韓国の20代の親しい間柄の女性同士と男性同士の自由会話で（日韓の男女各2組、計8組）、それぞれの会話の約30分を分析資料とする。

2. 内容

本節ではまず、内容に関する単位を取り上げる。内容を構成する単位には、「話題」およびその下位単位である「物語・評価・描写」がある。

2.1 話題

会話の全体的構造や枠組に関する研究はそれほど多くはなされておらず、自由会話の場合はなおさら少ないが、南（1981）は、会話はいくつかの談話からなるものとし、日常会話の全体的構造を区切る基準として、a. その部分の前またはあとのはっきりしたポーズ、b. その部分自身内部の連続性、c. 話し手および聞き手、d. その談話のcommunication上のfunction、e. ことばの調子、f. 話題の性格が一定していることを手掛かりとしている。また、電話の会話における勧誘談話のストラテジーを分析したザトラウスキー（1993）は、南（1981）の「会話」と「談話」という単位に加え、「話段」を設けている。「会話」は、電話会話の始まりから終了までの最も大きい単位で、その会話の中に「勧誘の談話」がある。そして、「勧誘の談話」の構成要素として「勧誘の話段」と「勧誘応答の話段」を設けており、「話段」は、勧誘と応答という目的を達成しようとすることが基準となる単位であるとしている。

一方、日常的な自由会話を分析した研究では、「話題」を最も大きい単位

として設ける場合が多い（Coates 1996、筒井2012）。「話題」は、南（1981）の基準の（f）話題の性格が一定していることに関連すると考えられるが、自由会話の研究において「話題」を会話の最も大きい分析の単位に設定するのは、勧誘―応答など、隣接ペアを成す目的達成のための会話とは異なって、特定の言語行動を手掛かりとし、会話の単位を区切ることが困難であるためであろう。また、人間関係を維持あるいは構築することが会話の目的である自由会話の研究において、「話題」は会話の展開のあり方や言語形式と機能またストラテジーの使用にも影響を与える一つの要因として考えられる。以上のことから、自由会話を対象とする研究においては、内容的な面から「話題」を最も大きい単位として設ける必要があると考える。しかし、実際の会話データの中から「話題」を客観的に区切ることは容易なことではない。これは、どこまで細かく一つの「話題」を区切れるかが人によって異なるためであろう。このような問題を避けるためには、河内（2003）のような話題区分調査[1)] を行い、「話題」を区切る作業を行うことが有効であると思われる。

2.2　物語と描写と評価

以上のように、「話題」を自由会話の最も大きい単位として設けたが、「話題」という単位は複合的な構造を持っている。筒井（2012）は、「話題」の内容の種類による連鎖組織、第一発話のタイプによる連鎖組織、各連鎖組織に現れる言語形式を分類し、「話題」を構成する連鎖組織を分析しているが、話題区分調査で区切られた「話題」の中では様々な種類の話が語られているため、「話題」のみで日韓あるいは男女の「話題」展開の仕方を対照することは困難である。そのため、「話題」より小さい単位が必要になるが、本稿では「話題」の内部を構成する様々なタイプの話を、以下の三つの観点から、表1のように、「物語」「描写」「評価」の三つの単位に分類する。それぞれの例については、（8）、（10）、（12）を参照されたい。

（A）過去のことか、現在あるいは未来のことか。

（B）イベント性があるかないか。

（C）外的な事柄に関する内容か、内的な事柄に関する内容か。

表１　「物語・描写・評価」の特徴

	A	B	C	例
物語	過去	あり	外・内的	経験談
描写	過去、現在、未来	なし	外的	映画やドラマなどの内容、特定の事柄に関する情報
評価	現在	なし	内的	先行する話に対する感想、特定の事柄に対する考えや感情

まず、本稿で扱う会話データでは、ヨーロッパの旅行であったことや買い物であったことなどといった様々な出来事が語られているが、これらは過去の経験に関する話という共通点を持つ。本稿では、自らの過去の出来事に関する内容が時系列上[2)]（イベント性）で連鎖され、その内容に、結束性のある開始と終了がある部分を「物語」として分類する。次に、会話の参加者は、映画や漫画に関して話したり、自分を巡る様々な状況に関して話したりするが、これらは特定の外的な事柄（状態）に関して説明するという点が共通している。本稿では、外的な事柄に関して情報を提供する発話の集合体を「描写」として分類することにする。最後に、会話の参加者は、結婚に関する自らの考えを話したり、先行する話に関する自らの感想を話したりするが、自らの考えや感情また感想は人の内的なものである点で共通点を持つ。このように、内的な事柄について語る発話の集合体を「評価」というもう一つのタイプとして分類することにする。

3. 会話の参加形式

次に、会話の参加形式について説明する。

会話は、参加している人が互いに話し手になったり聞き手になったりする

ことを繰り返すことで成立する。会話の参加形式を明らかにするためには、ターンと発話という単位が必要になる。また、話し手と聞き手という会話における役割の概念も整理しておく必要がある。

以下では、本稿における話し手と聞き手、ターン（§3.1）、発話（§3.2）とは何かについて述べ、会話の参加形式の観点から、ソロパートとデュオパート（§3.3）が認定できることについて述べる。

3.1　話し手と聞き手、ターン

会話におけるターン交替を分析したSacks et al.（1974）は、ターンを「一人の話し手が始めてから他者が発話権を受けるまでのすべての発話である」と定義している。Sacks et al.（1974）の定義は、ターンを物理的に捉えているため、あいづちや短いコメントもターンとして認め、ターン交替として認定するものである。しかし、ターン交替とフロア（誰が話す権利を持っているか）を分析したEdelsky（1981）は、ターン交替が行なわれても会話の参加者がその場で誰がフロアを持っているのかという共通の認識によってフロアの所有者が決定されるとし、ターン交替が行なわれてもフロアは取っていない場合もあると指摘している。友人同士の自由会話を分析したCoates（1996）は、Edelsky（1981）のフロアという観点から「話題」の中には一人の話者が発話権を維持し過去の出来事などについて物語る部分（Story）と会話の参加者が一緒に話し合う部分（Discussion）があるとしている。また、聞き手の言語行動や発話順番を分析した多くの研究では、あいづちや短いコメントはターンとして認めていない（堀口1997、李1999など）。これらの研究は、ターンを会話における役割関係から捉えているためであり、木暮（2002）が指摘したように、ターン交替と会話における役割の交替は必ずしも一致するわけではない。

以上の議論をふまえ、本稿では、話し手と聞き手を役割関係の観点から、ターンを物理的な観点から捉えることとする。以下に、本稿における話し手と聞き手、ターンの定義と会話例[3)]を示す。

・**話し手**（以下の（1）では、JTM3が話し手である。）
特定の事柄に関して情報を持ち、それに関して発話権を維持しながら語るという行動を行っている会話の参加者。
・**聞き手**（（1）では、JSM4が聞き手である。）
話し手が語る際、聞いていることを表すことを優先とし、発話権を得るためではない発話をする会話の参加者。
・**ターン**（（1）は5つ（JTM3:3つ、JSM4:2つ）のターンで構成されている。）
ターンとは、相手の物理的な発話によって区切られるものとする。

（1）JTM3: あの　もう回りにしてみたら　こいつ何も分かってないなって思われていると思うわ　ほんまに　高校生の知識やからさ　みんな電気の専門の大学院まで　（JSM4: うんうん）　行ってるような人ばかりやからま　そら::　回路図も読めるし（JSM4: うんうん）　まあ　ある程度の意味も分かってるからさ

以上、本稿における話し手と聞き手の定義、そして、ターンの認定法について述べた。しかし、自由会話においては、話し手と聞き手の区分が比較的に明確である場合もあれば、その区分が明確ではない場合もある。これに関しては、§3.3でより詳しく述べる。

3.2　発話

会話における発話をどのような基準で認定するかは、研究の立場によって異なっており、一つの言語を分析対象とする場合、ポーズやターン交替によって区切られる一つのまとまりを一つの発話と認定することが多い。しかし、会話におけるポーズやターン交替のあり方は、日韓または男女で異なる可能性がある。本稿では、このような違いを明らかにするために、次のような基準で発話を認定する。

◎発話として認定するもの

・連体修飾節と補足節を除いた節は一つの発話として認定する。「から」「ので」「ために」「たら」「なら」「ても」「けど」などの節。

（2）JYF6: 全員がさ　全員頑張らんかったら　→《発話数:1》

・節の形はなしていないが、相手の実質的な発話でターン交替があったものは、一つの発話として認定する。

（3）JSF3: 行きたいところ ま［た 移動］　→《発話数:1》

JKF4:　［第に　うん］ 第二空港　→《発話数:1》

・あいづちは一つの発話として認定する。

（4）JAF2: うん　→《発話数:1》

◎発話として認定しないもの

・名詞を修飾する連体修飾節と名詞として役割を果たす補足節（「こと、の、ということ」などによって名詞化した発話）は一つの発話として認定しない。

（5）JYF6: みんな入ることがゴールやと思うんちゃう　→《発話数:1》

・一人の話者の繰り返しは,何回繰り返されても一つの発話とする。

（6）JYF6: そうそうそう　→《発話数:1》

・フィラー的なものは発話として認定しない。

（7）JSF3: あの:: なんか　チェックするのってその会社によって違うん　→《発話数:1》

以上、本稿における話し手と聞き手、ターン、発話とは何かについて述べた。以上の認定法をふまえ、次の §3.3 では会話の参加形式について具体的に述べる。

3.3　ソロパートとデュオパート

会話は会話の参加者の相互行為であるため、一人の話者だけが話すことによって完結することはない。しかし、会話データを、ターンと発話数及び話し手と聞き手という役割の観点から見てみると、会話の参加形式には（8）のように話し手としての役割を果たしている話者の発話数が多く、ターン交

替は聞き手のあいづちによるものが多い部分（以下、「ソロパート」とする）と、（9）のように二人の話者の役割や発話数に大きな差が見られず、共同で話し合う部分（以下、「デュオパート」とする）があることが分かる。

（8）【日本、男性同士、ソロパート：一日の働きについて】
JSM4: ある一日の動き（JTM3: うん）っていうの例えばどんな動きしてるみたいな話をしてて（JTM3: はいはい）例えばぼくやったら　朝　ま6時半に起きて（JTM3: うん）で　7時ぐらいに家を出て　で　学校行って

（8）を見てみると、ターン交替は、聞き手としての役割を果たしている話者（JTM3）のあいづちの使用によって行われ、聞き手（JTM3）の実質的な発話は見られないことが分かる。一方、会話の中には（9）のように二人の会話の参加者の実質的な発話数に大きな差は見られない部分もある。

（9）【日本、男性同士、デュオパート：職場の人について】
JTM3: 回りの人結構いい人やから楽しくやってる
JSM4: それはいいよね
JTM3: うん　そこはほんまに助かったわ
JSM4: やっぱ人やね

（9）のような例は、話し手と聞き手の区分が明確ではないことを意味すると同時に、二人は特定の事柄について共同で話し合っていることを意味する。

このように、会話は話し手と聞き手の役割が相対的に明確なソロパートと、会話の参加者が共同で何かに関して話し合うデュオパートによって構成されていると考えることができる。本稿では、ソロパートとデュオパートを以下のように定義し、以下の基準で認定する。

◎**ソロパート**とは、特定の事柄について情報を持っている一人の話者が話し

手になり、複数の発話を用いて語る部分で、話し手と聞き手の役割関係が相対的に明確である部分とする。

（a）話し手は、特定の事柄に関して5つ以上[4)]の発話を用いて語る。

（b）話し手の実質的な発話数に比べ、聞き手の実質的な発話数は少ない。

（c）ターン交替は、主に聞き手のあいづちや短い発話によって行われる。

◎**デュオパート**とは、話し手と聞き手の役割関係の区分が明確ではない部分で、会話の参加者の発話数に大きな差が見られない部分であるとする。

（a）特定の事柄に関する会話の参加者の発話数に大きな差が見られない。

（b）特定の事柄に関する会話の参加者のターン交替が4回以上行われる。

デュオパートの認定において、発話数とターン交替を基準として設けた理由は、まず、話し手と聞き手の役割関係が明確ではない部分を取り出すためであり、「問い」－「答え」などといった単なる隣接ペアによるターン交替の部分は除くためである。（b）で「会話の参加者のターン交替が4回以上行われる」としたのは、そのためである。

表2　各パートにおける発話数

日本	女性同士の会話		男性同士の会話	
パート	ソロ	デュオ	ソロ	デュオ
発話数	415	1534	986	736
韓国	女性同士の会話		男性同士の会話	
パート	ソロ	デュオ	ソロ	デュオ
発話数	648	1354	985	712

ここで、ソロパートとデュオパートという分析枠の有効性を理解するために、日韓の同性間の自由会話で展開されたソロパートとデュオパートの総発話数を示した表2を見ておこう。表2で分かることは、日韓同様に、女性同士の自由会話は主に共同で話し合うデュオパートによって構成されることが多いが、男性同士の自由会話は、主に会話の参加者の一人が発話権を維持して語るソロパートによって構成されることが多いことである。このように、ソロパートとデュオパートという分析枠を使用すると、会話の参加形式に日韓同様な男女差が見られることがわかる。次に、§4では、§2で取り上げた「内容」と、§3で

見た「会話の参加形式」の関係について述べる。

4. 内容と参加形式の相関関係

ここでは、内容の単位として設定した「物語・描写・評価」と、もうひとつの分析枠であるソロ・デュオパートの相関関係について述べる。内容と参加形式は、次元の違う観点からの分類であるが、どのような話者の間の会話であれ内容がある特定の参加形式と結びついているものと（「普遍的な結びつき」とする）、内容と参加形式の結びつき方に男女差などが見られるものがある。

以下の §4.1 では内容が一つの参加形式でしか現れないものについて述べ、§4.2 では、内容と参加形式の結びつき方に男女という要因が関わるものについて述べる。

4.1 普遍的な結びつき：「物語」とソロパート

二者間の会話において、自らの経験談を語る「物語」は、日韓、男女に関わらずソロパートのみで展開される。「物語」がソロパートで語られるのは、聞き手にとって話し手が語る経験談は新情報であるためである。聞き手はあいづちを打ったり、質問したりし、協力的な支持は見せながらも、実質的な発話数は話し手に比べ圧倒的に少ない。

4.2 男女差が見られる結びつき

次に、「描写」と「評価」がどのようなパートで展開されるかには日韓同様な男女差が見られる。

4.2.1 「描写」と参加形式

まず、「描写」の場合、男性同士の自由会話では（10）のようにソロパートで展開される場合が多い。

（10）【日本、男性同士、ソロパート：テレビ番組のゲームについて】

JAM1: 最近テレビ番組でヌメロンっていうフジテレビの月曜日かな　の　夜かな（JBM2: は）何か　やってる番組があるんだけど（JBM2: ほうほう）そのゲーム　まあ　よくある　まあ（JBM2: ゲーム）そう　ボード

一方、女性同士の自由会話で「描写」は、（11）のようにデュオパートで展開される用例が多く見られる。

（11）【日本、女性同士、デュオパート：ワンピースの内容について】

JAF2: ワンピース　読んどー人に聞いたら　絶対さ　あれ泣くでっていうねんけど

JOF1: まあ::　な

JAF2: ワンピースめっちゃええ話やでみたいな

JOF1: 泣くけど　わざとらしいような気もする

JAF2: あ　そうなんや

JOF1: う::ん　なんかな　なんか　なんか　ある意味　ようどう

JAF2: ふん　仲間助けてみたいな　［仲間］と戦って

JOF1:　［なんか］　あの　だれかと別れて

外的な事柄に関する内容である「描写」は、（10）のように話し手が提供する情報が新情報である場合はソロパートで、（11）のように会話の参加者の二人が特定の事柄に関してすでに情報を持っている場合は、デュオパートに近くなる性格を持つ。この観点から、女性同士と男性同士の自由会話における「描写」の参加形式のあり方の違いを考えると、男性同士は、聞き手に新情報を提供するための「描写」が多く、女性同士は、共通の知識を基盤とした「描写」が多いということになる。このように、外的な事柄に関して語るという行為が中心である「描写」が展開されるとしても、「描写」を展開

させる目的、つまり情報を提供するか、あるいは互いに情報を持っている事柄について話し合うことを目的とするかが会話の参加形式に影響しており、男性同士の会話では情報提供のための「描写」が多いためソロパートの展開が、女性同士の会話では共通の知識を基盤とした「描写」の展開が多いためデュオパートの参加形式が多く見られると考えられる。

4.2.2 「評価」と参加形式

特定の事柄に関して自らの考えや感情を話す「評価」は、日韓男女関わらず（12）のように、デュオパートで多く見られる。

（12）【日本、女性同士、デュオパート：ドラマについて】
JOF1: めっちゃ無駄になるもん　あ［れ］
JAF2:　　［そう］やねん
JOF1: しかも　言う程さ　なんか（1）　意外な結末ってないよな
JAF2: ないな　ま　でも　なんか　この女の人やろな: みたいな =
JOF1:　　=そそ
　　大体　なんか　こ　あやしい人いるよな
JAF2: おるおる　一番近くにおる女の人とかな

（12）のように、「評価」は特定の事柄に関する二人の会話の参加者の同意を表す発話や先行する発話と類似した意見の連鎖によって構成される場合が多く、このような連鎖は女性同士の自由会話で多く見られる。

一方、数少ないながらも男性同士の自由会話では、評価の対象が個人的な事柄（悩みごとなど）である場合、ソロパートで「評価」が展開されている用例が見られる。また、（13）のように、相手の意見や感情に同意しない場合、「評価」がソロパートで展開される用例も観察される。

（13）【日本、男性同士、ソロ・デュオパート：アニメーションを見ていると話す人について】

1. JBM2: にわかが多い　ほんまに 「大学入って最近のアニメ事情に精
2. 通します」とか言われても　おれからしたら 「はい」 みたいな
3. 「はい」中学高校で暇な時間にアニメとか見飽きるやろっていうのが
4. 通説で（JAM1:〈@通説@〉@）何かもう　それはちょっと　大学
5. に入ってアニメを 「アニメ好きです」をアピールされるとちょっ
6. とさめる

----------「デュオ」----------

7. JAM1: あ　おれ　にわかやったわ
8. JBM2: にわかや　それはにわかや
9. JAM1: 大学入ってから　見出::　まあ　パソコン買ったっていうのも
10. あって見出したから
11. JBM2: 別に見出してもええんやけど 「おれはオタクです」アピールする人は古い　古い

（13）を見てみると、1 行目から 6 行目にかけて、JBM2 は「大学に入ってアニメーションを見出していると話す人は古い」と自らの考えを話す「評価」をソロパートで展開させていることが分かる。JBM2 のソロパートの「評価」の後、JAM1 の実質的な発話（7 行目）から、デュオパートの「評価」が展開されるようになるが、JAM1（10行目）の発話から分かるように、JAM1 は JBM2 の考えに同意せず別の意見を提示している。このように、会話の参加者が相手の考えや感情に同意あるいは同感しない場合は、会話に積極的に参加せず、相手の話を聞くという行動を中心とするため、会話の参加形式はソロパートに近い形になる。

以上、本節では、内容と会話の参加形式との結びつき方について述べた。二者間の自由会話において、日韓、男女に関わらず「物語」は、その性格上ソロパートでしか展開されない。一方、「描写」と「評価」はソロパートで

もデュオパートでも展開され、それらがどのようなパートで展開されるかには日韓で類似する男女差が観察される。具体的には、日韓ともに男性同士の会話では、女性同士の会話に比べてソロパートでの展開が多いという違いである。後者のような自由会話に見られる男女間の相違は、本稿で提示したような内容と会話の参加形式という分析枠によって明らかにすることができるものであり、この枠の有効性を示すものである。

5. まとめ

以上、本稿では、自由会話は複数の「話題」の積み重ねられたものであり、「話題」はさらに、「物語・描写・評価」という内容の組み合わせで構成されること（§2）、また、会話の参加形式の観点からは、話し手と聞き手の役割がはっきりしたソロパートと二人の会話の参加者が共同で作り上げるデュオパートが認められることについて述べた（§3）。そして、内容と会話の参加形式という二つの次元から分析の枠組を設けることで、たとえば日韓の女性同士の自由会話と男性同士の自由会話にある相違点を明らかにすることができることを確認した（§4）。本稿で提示した内容と参加形式という二つの次元で構成する分析枠は、日韓に見られる男女差のほかにも、自由会話における「話題」展開の仕方や会話全体の構造を広く分析、対照する際に、有効な枠組みになると思われる。

今後の課題としては、まず内容を構成する単位である「物語」と「描写」と「評価」の連鎖のありかたを明らかにしていく必要がある。たとえば、会話の参加者二人による「物語」の連鎖や、先行する内容の後に加えられる「評価」など、内容は「話題」の中で結束性を持っている。このような内容を構成する単位の相互連鎖を分析することで、日韓男女の「話題」展開の仕方に存在する一定のパターンを見出すことができると考えられる。また、「話題」を構成するそれぞれの単位が二人の会話の参加者によってどのような目的（ストラテジー）をもってどのようなパートで連鎖されているかとい

う、会話の参加形式の観点を含めた分析も必要であると考えている。

［注］

1)　会話収録に参加していない日本語母語話者と韓国語母語話者それぞれ 3 人の協力を得て、文字化資料から、「話題」が大きく変わったと思われる箇所を区切ってもらった。そして、著者を含め 4 人の内 3 人が、話題が変わったと認定した箇所を「話題」として認定した。

2)　Labov（1972）は、ナラティブ（物語）とは、少なくとも二つ以上のナラティブの節を持つとし、ナラティブ節は、時系列（temporal sequence）の順になることが特徴であると述べている。たとえば、This boy punched me/and I punched him と、I punched this boy/and he punched me のように、ナラティブの節が逆であれば、本来の意味的な解釈も変わることを時系列（temporal sequence）を持つとしている。

3)　会話例で使用する記号については、本論末尾参照。

4)　発話数を基準としたのは、会話の中で話し手と聞き手の区分が明確な部分を取り出すためである。

［参考文献］

李麗燕（1999）「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」―発話順番のやり取りとの関係を中心に―」『世界の日本語教育』9　pp.221-239.

河内彩香（2003）「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究』3　早稲田大学大学院日本語教育研究科　pp.41-55.

木暮律子（2002）「話者交替における発話の重なり―母語場面と接触場面の会話について―」『日本語科学』11、国立国語研究所 pp.115-134.

ザトラウスキー・ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察―』くろしお出版

筒井佐代（2012）『雑談の構造分析』くろしお出版

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版

南不二男（1981）「日常会話の構造―とくにその単位について―」『言語』1-2 pp.28-35.

Coates, J. (1996)*Women Talk:Conversation between women friends*.Blackwell.

Edelsky, C. (1981) Who's got the floor?, *Language in Society*10-3:383-421.

Labov, W. (1972) *Language in the inner city*. Philadelphia:University of Pennsylvania Press.

Sacks, H., Schegloff, E.A.&Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language*50:696-735.

会話例の文字化表記

データの読みやすさを考え、ソロパートの会話例で聞き手の発話は話し手の発話の中に(　)に入れ表記するが、デュオパートの会話例はターン交替に従い、改行を行う。

音の伸ばし	:	笑い	@
上昇イントネーション	?	笑いながら	〈@…@〉
途切れなく密着した発話	=	個人情報	＃＃
重なり	［…］	聞き取り不明	X
ポーズの秒数	（数）	引用発話	「….」
パート区分線	-----	筆者のコメント	（(…)）

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

Framework for Japanese and Korean Natural Conversation Analysis
—From the Perspective of Topic and Participation—

Yun Ah Jang

This paper proposes that two different dimensions of methodological framework are necessary when analyzing differences between languages or between genders in natural conversation.

After analyzing Japanese and Korean data consisting of 8 natural conversations between two friends of the same sex, it was found that in terms of content, the conversations consisted of several topics and these topics were constructed through a combination of narrative, description and evaluation. Moreover, in regard to the speaker's participation in conversation, two "parts" were identified: a solo-part which is developed by one participant, and a duo-part which is developed by both participants.

Through analyzing the correlation between content-type and part-type, it was found that narrative was developed only in solo-part regardless of gender/language differences, while description and evaluation were developed in both parts. However, gender differences were found in the case of the correlation between description and evaluation and part. Namely,men tend to develop description and evaluation in solo-parts while women tend to develop them more in duo-parts.

This correlation analysis demonstrates that the structure of natural conversation differs in terms of gender. These results suggest that two different dimensions of methodological framework are applicable to contrastive conversation analysis focused on differences between languages or between genders: "topic" and "participation".